

次世代育成を鑑みた子育て支援

—潜在能力の美德を引き出す子育て支援へのパラダイム—

浦山 晶美¹⁾²⁾

1) 山口県立大学看護栄養学部

2) The Virtues Project - Facilitator

はじめに

子育ての質や内容は悪しきことも良いことも次世代に伝達されやすい。現在、「健やか親子21」では育児不安や児童虐待などの心の問題に取り組む多様な子育て支援がなされている。不適切な養育態度や虐待は多くの要因が絡み合って発生するが、その中でも親自身の養育歴が重要な要因と考えられる¹⁻⁵⁾。これまでの研究結果によると不適切な養育態度を継続して受けることにより乳幼児期の愛着が歪み、それが認知の仕方に影響を及ぼしていると考えられている⁶⁻⁹⁾。そして、親の養育態度は子どもの成長発達過程に影響し、思春期保健の問題、例えば心身症、引きこもり、暴力などは乳幼児期の発達における体験の質に影響を受けていることが明らかになってきた¹⁰⁻¹³⁾。現在、多様な子育て支援は実施されているが、育児困難、虐待、思春期の心の問題が増加しつつある。このような社会現象から、新たな子育て支援のパラダイムを模索する必要があると考えられる。

筆者は、介入研究として Virtues Project (以後 VP と略す) のアプローチを導入してマタニティクラスを編成し実践した経験がある。Virtues とは、日本語で美德、長所と訳されている。研究は、介入群と対照群を設けて、介入群には保健指導と VP のアプローチを加えたクラスを、対照群には保健指導のみのクラスを実施しクラスの効果を自己効力感と自尊感情等の尺度を用いて測定した。また、両群とも参加後の感想文も書いていただき質的に分析した。結果は、介入群では参加後において自己効力感と自尊感情の尺度得点が有意に上

昇したが対照群では変化はなかった。質的な分析結果においても美德の視点は子育てに有効であるとの結果が得られた。VP は人間が潜在的にもっている、思いやり、優しさ、忍耐、責任等といった美德を引き出すようなプロジェクトである。そのような美德の実践を子育て支援の一部として取り入れ、次世代へと継げていくことは重要である。本稿は、これまでの公共機関の子育て支援について概観し、次いで、人間の潜在能力を引き出す方法として筆者が研究で引用した VP について述べ、最後に新たな子育て支援のパラダイムとして美德の実践方法を取り入れることの必要性について述べる。

公共機関の子育て支援

1. 少子高齢化を背景とした子育て支援

厚生労働省は少子高齢化という人口変動から1994年に今後の子育て支援の施策の基本的方向性としてエンゼルプランを策定した。これは1995年度から10年間で社会全体での子育て支援策の総合的な計画を推進することを目指したものである。1999年には推進すべき具体的計画として新エンゼルプランが策定され、主に母子保健医療体制を整備する内容が盛り込まれた。そして、「健やか親子21」は、21世紀の母子保健の主要な取り組みを提示するビジョンとして関係機関・団体が一体となって推進する国民運動計画として、2001年から10年間に渡り計画実施されてきた。しかし、課題目標が十分に達しきれなかったため2014年まで延長された¹⁴⁾。今後充実すべき具体的な取り組みと

して、①思春期の保健対策の強化と健康教育の推進、②妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援、③小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備、④子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減、を掲げた(表1)。また、少子化の流れを変える取り組みを強化するため、国の基本施策として「少子化社会対策大綱」を策定し、2004年に具体的な実施計画を「子ども・子育て応援プラン」としてまとめた。これらの具体的な行動計画は、事業主と地方公共団体が主体的に取り組むことが望ましいとされている。具体的な育児支援の内容例として、「夫の家事育児の協力」を掲げている¹⁵⁾。「イクメン」という言葉が流行したが、これは男性が育児休業基本給付金制度を利用し、育児休暇をとって積極的に育児を行う男性を賛美する言葉として出来たという背景がある。また、その他の支援として、婚前期には性教育・育児体験・相談活動等、妊娠・分娩期には両親学級・母親学級・妊婦健康診査の無料化・不妊に悩むものへの支援等、育児期には具体的な育児相談・育児学級・電話育児相談・家庭訪問等がそれぞれの市町村の特徴を出しながら取り組まれている¹⁶⁾。

2. 子ども虐待の現状と防止の取り組み

虐待に対する法制度は、基本的な柱として児童福祉法と児童虐待防止法がある。2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」が成立された。これにより、児童虐待の防止等に関する施策が促進され、児童に対する虐待の禁止、児童虐待の防止に

関する国、地方公共団体の責務、児童虐待を受けた児童の保護者のための措置等が規定された。しかし、厚生労働省の2006年の調査によると、児童相談所に寄せられた虐待の相談対応件数は3万7千件で、これは統計を取り始めた1990年と比べ34倍に増加している(図1)。主たる虐待者の62%が実母で、次に実父22%であり、8割強が実の両親である。虐待の内容別件数では、身体的なものが41%、ネグレクトが39%で、最近ではネグレクトによる事件が増加している。また心理的なものは17%である¹⁷⁾。その他考慮すべき状況として、心理的な虐待へにつながる言葉の暴力や、母親が子供と向き合うことが辛いという状況が想定され、現実には児童相談所に寄せられた相談件数よりもはるかに多く虐待が存在していよう¹⁸⁾。

「健やか親子21」における子育て支援の基本理念は豊かな人生が送れるように個々の親子を支援することにある。主要課題の1つとして「子どもの心の安らかな発達の促進と子育ての不安の軽減」を掲げ、子育て不安やストレスの延長線上にあると考えられる虐待への対策を柱とし、母親が子育てを楽しみ子どもに愛情を注げることができるようにする行動計画が練られている¹⁹⁾。例えば乳幼児健診では、母親の心理的側面の把握と母親の話を安心して聞いてもらえるような場として活用し、また母親がリフレッシュできる時間が持てるように一時保育の拡大もされてきた。また、虐待の予防と早期発見への取り組みの例として、周産期では母子健康手帳交付時にリスク情報を得て必要に応じて保健師が面接しサポート体制を敷き、産後

表 1. 21世紀初頭における母子保健の国民運動計画 (2001~2014年)

課題	①思春期の保健対策の強化と健康教育の推進	②妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援	③小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備	④子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減
主な目標 2014年	<ul style="list-style-type: none"> 十代の自殺率 (減少傾向へ) 十代の人工妊娠中絶実施率 (減少傾向へ) 十代の性感染症罹患率 (減少傾向へ) 	<ul style="list-style-type: none"> 妊産婦死亡率(半減) 産後うつ病の発生率 (減少傾向へ) 産婦人科医、助産師の数 (増加傾向へ) 	<ul style="list-style-type: none"> 全出生数中の低出生体重児の割合 (減少傾向へ) 不慮の事故死亡率(半減) 妊娠中の喫煙率、育児期間中の両親の自宅での喫煙率 (なくす) 	<ul style="list-style-type: none"> 虐待による死亡数 (減少傾向へ) 出産後1ヶ月時の母乳育児の割合 (増加傾向へ) 親子の心の問題に対応できる技術を持った小児科医の割合 (増加傾向へ)
親子	応援期 思春期	妊産婦期~産じょく期 胎児期~新生児期	育児期 新生児期~小児期	育児期 新生児期~小児期

「健やか親子21」公式ホームページより抜粋¹⁴⁾ <http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/abstract.html>

においては、うつ傾向にある母親への家庭訪問、自助グループ支援、電話相談を実施している²⁰⁾。

上記に示したように公共機関において育児困難や育児不安そして子ども虐待防止の取り組みが多様な形態で推進されているが、育児困難や虐待件数は減少するどころか増加する一方である。このような状況において、リスクに焦点を当てた支援と同時に、これから子育てをしようとする親、そして育児をしている親たちに物質的な支援と共に本来人間が持っている潜在的な能力を引き出すような新たな子育て支援の方向性が必要である。

潜在能力である美德を引き出す子育て支援の パラダイム：VPのアプローチ導入

1. VPについて

世界的にも家庭の崩壊や虐待が増加し犯罪の若年化が進んでいるなかで、1994年に国連で「国際家族年」が提案された。これは国際児童年に始まる10年間の作業過程で、子どもの人格形成における家族そのものが危機的状態を深めている現状から発展してきたものである。VPは「国際家族年」の会議（1995年）で、最優秀モデル・プログラム

として選出された。現在、90カ国に紹介され、学校・実業界・カウンセリングの分野で活用されている²¹⁾。VPは日本語で「美德・教育プログラム」と訳される。VPは1991年に Linda Kavelin-Popov（臨床心理士）Dr. Dan Popov（小児精神心理学者）、John Kavelin（元 Disneyland director）によって、全世界のあらゆる聖典をもとにして構成された。このプロジェクトの引金は、世界中で家族の崩壊、若年化した犯罪や暴力の増加現象を憂慮したことにある。そこで3人は世界中のあらゆる聖典を研究し、「人間の美德とは何か—それは単純な叡智に基づいたもので、文化や価値観を超えたものである」という共通点を見出した。研究を進めていく中で、人間の精神的な人格を表す言葉が360個程度あることがわかった²²⁾。その中から、一般的な家庭、子どもの人格の発達、自尊心の形成の助けになる美德の言葉として52に絞られた（表2）。

このプロジェクトの目的は、人間の道徳的な視点を取り戻し人間的な資質の発達を支援し、美德に基づいた人間関係を築いていくことにある。そして、目的に沿ってワークショップを積んでいくことによって、人間関係、自尊感情、美德の視点を培うこと等が期待できると考えられている。と

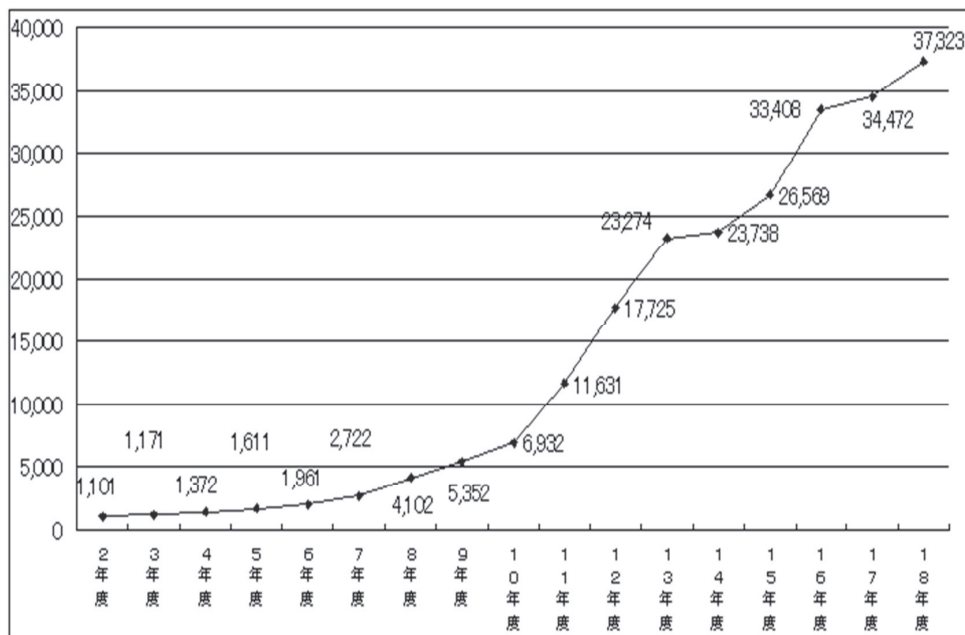


図1. 虐待に関する相談対応件数の推移

(厚生労働省調査)¹⁷⁾ <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv16/>

くに子育て中にある養育者には、忍耐・寛容・優しさ・ゆるし等を発揮しなければならない場面が多い。それらのことが具体的に実践できる方法があれば、母親の心理的な負担も軽減される。日本では、2007年にVPのNon-Governmental Organizations (NGO)が成立した。日本の中学校でも、この方法を本格的に学校教育の中に取り入れた施設があり、生徒の自尊感情が向上したという報告がある²³⁾。

VPには4つの基本原理がある。それは、(i)親は子どもの最初の教育者である、(ii)子どもたちは大きな可能性をもって生まれるが、その資質が良い方向へ行くか、悪い方向へ行くかは、子どもがどのように教育または養育されるかによる、(iii)人格は子どもたちが責任ある道徳的選択をすることを学ぶにつれて発達する、(iv)自尊心は道徳の選択を主体とする生き方から自然にでてくる、である²⁴⁾。VPが規定している所定の研修を受けると、公認ファシリテーターの資格を得ることが可能である。この資格はVPの理念や基本的な原理を理解し実践できることを前提として認定されるが、ワークショップを開催する時は、対象者に合わせて既定のマニュアルに沿って、時間的配分、方法、内容にアレンジを加えることができる。

2. VPのアプローチを導入した両親学級

筆者は「VPの手法を取り入れたマタニティクラス」のプログラムが自尊感情と自己効力感を向上させる効果があることを明らかにした²⁵⁾。ここで、言葉の定義をしておく。VPの理念、原理や実践

方法を対象に応じて一部取り入れて実践することをVirtues Approach (以後VAと略す)という。研究手法は無作為割り付けでない介入研究であった。介入群(保健指導にVAを追加した両親学級を実施する群)と対照群(保健指導だけによる両親学級を実施する群)の2群比較で、結果は介入群の方がクラス参加後には参加前よりも自尊感情と自己効力感が有意に上昇したが、対照群では変化はなかった。介入群では、VAとして毎回クラスの最後にグループになり話し合う時間を設定し、安心して自分のことが話せるような場を作り自己のことを話してもらった。話の聞き手は、受容、傾聴、共感の姿勢をあらかじめ練習しておいた。話し合いの後、話の中から実践した行動内容を美徳の言葉に置き換え相手に伝え承認するというワークである。これをVPではシェアリングサークルと表現し、その実施プロセスを図2に示した。介入群のこのような一連のワークが自尊感情、自己効力感を上昇させる要因であったと考えられた。遠藤²⁶⁾、森口²⁷⁾らは道徳や人間の資質と考えられる美徳が自尊心の枠組みの中にあり、それを実践し身につけていくことが人格形成につながっていくことを説明している。そして、Maslow²⁸⁾の成長発達理論の第4番目の「承認の欲求」は、他者より本来の自己を尊敬され認められたいという人間の深層心理的な欲求がある。VAの「相手の行った行為について美徳のことばで承認する」という実践行動がMaslowの「承認の欲求」に当たると考えられた。VPでは相手の良いところを承認する場合、ネーミングをするような表現は用いない。例えば、子どもが「お年寄りに席をゆずる」

表2. 52の人間の資質を表わす言葉をvirtues(美徳)として表現

愛	識別	誠実	名誉	共感	親切	忠誠心	ゆるし
いたわり	自制心	辛抱強さ	優しさ	協力	信頼	慎み	喜び
思いやり	自信	整理整頓	やすらぎ	勤勉	信頼性	手伝い	理解
感謝	柔軟性	責任	目的意識	決意	正義	忍耐	理想主義
寛大	正直	節度	勇気	謙虚	清潔	奉仕	和
寛容	情熱	創造性	友好	優秀	自己主張	無執着	礼儀
気転	真摯	尊敬	コミットメント				

注釈

価値観は文化によって変わるがこれらの言葉は特定の宗教やイデオロギーに偏っておらず、これらは、人間の資質の要素である。(Linda Kavelin Popovらが提唱した実践生活の場で活用する52のVirtues)³⁹⁾

という行為を承認するとき、「親切な子」ではなく、行動の美德の実践内容を捕らえて、「お年寄りに席をゆずることは親切なことで、その態度に感謝します」と承認する。つまり、美德の行動を具体的に示し強化することも狙いとしている。ワークでは承認すること以外に、ものの見方に変化をもたらす内容も含んでいた。それは、現象をとらえる時に美德の観点から認知するという手法であった。介入群の参加後の感想を質的記述的なカテゴリで捉えた結果、参加者は、美德の言葉が心に響いて〈美德を育児に取り入れることの価値観の芽生え〉、〈美德を日常生活に取り入れることの価値観〉、そしてグループワークに参加することにより他者と伴に〈人との交流の喜び〉を共有し、受け身ではなく積極的に学級に参加でき〈有意義な時間の享受〉をすることができ、〈次回への期待〉を望むものであった²⁹⁾。具体的には、数人の母親は承認されることによって「今まであまりほめてもらったことがないです」「家事ばかりやっているけど、そうやって認められると嬉しいですね」と、涙ながらに語る人もいた。母親は育児や家事を一生懸命やっているが、そのことを誰かに知ってもらいたい、それを承認という形で認めるということは非常に大切なことである。このように、母親たちの相談を受ける場合には、まず話を傾聴し、その後に必ず今までの努力を美德

の言葉で認め、次に解決策を探っていくというプロセスが母親たちの次なるステップへの鍵であると考えられた。

3. 潜在能力である美德を育てる必要性

現代社会では、「子どもは可愛いが子どもといるとイライラする」、「子どもにどのように接したらいいのか分からない」という母親が増加してきている³⁰⁻³²⁾。乳幼児期は子どもの人格形成や愛着形成に重要な時期で、子どもは親からの愛情が必要である。では慈しみ愛するということはどういうことなのだろうか。

著名な社会心理学者、Erich Frommの著書³³⁾に“Art of loving”がある。その著書の冒頭に、『愛は技術であろうか。技術であれば、愛するには知識と努力とが必要になる。人は愛における重要な要因、すなわち、意志を無視している。誰かを愛するという事は決して強い感情ではなく、それは決断であり、判断であり、約束なのである。もしも愛がただの感情に過ぎないものであったなら互いに永久に愛するという約束の基礎はないだろう。愛は活動であり人間の力の実践である』³⁴⁾と記されている。即ち愛するという事は技術を習得するように自己を鍛錬し、その技術が熟練できるように努力することである、とFrommは述べている。また、『愛が、いかに生きるべきかと

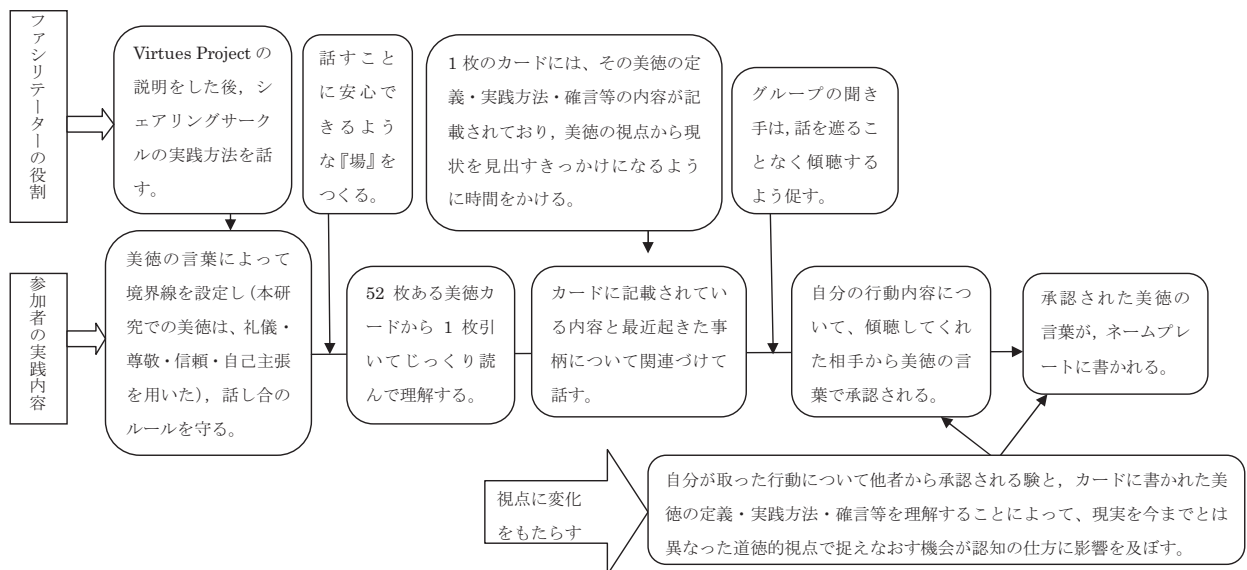


図2. シェアリングサークルの実施プロセス

いう問題にたいする唯一の健全で満足のゆく答えだとしたら、愛の発達を阻害するような社会は人間の本性の基本的欲求と矛盾していることから、やがては滅びてしまう。愛することは人間の根源的なことで能動的な行為である。そして愛の能動的な要素とは配慮、責任、尊敬、知であり、そして、愛とは愛する者（相手）の生命と成長を積極的に気にかけることである。この積極的な配慮のないところには愛はない』。そして『愛は信念の行為であり、わずかな信念しか持っていない人は、わずかしか愛することは出来ない』とし、愛することは人間の資質に関連し、その資質とは人間の美德の発達であると述べている。また、『資本主義を支えている原理と、愛の原理は両立させない』と声明している。何故ならば、『資本主義の原理は同等の価値のあるものとの“交換”にあり、あるものと別のものを引き換えることを原則とし、引き換えられる物は現存するという保障を前提にして成立している。すなわち、資本主義の社会では交換することなく与えるという行為は損失を意味している。しかし、愛するという行為は、何の保証もないのに与え、行動を起こし育てることであり、愛を引き出しうるのは愛のみであり、その学習に必要なものは精神統一、鍛錬、忍耐、関心である』と述べている³⁵⁾。しかし現代社会は資本主義の原理が発達し、物質は生活に潤いをもたらしたが、その結果、人間の競争心はあおられ、家庭においてはわが子をありのままの姿で丸ごと受け止める心のゆとりを失いがちになってきている。すなわち、愛するという行為は美德の実践を含むことであるとするならば、わが子を丸ごと受け止

められないということは、愛の欠如であり、美德の実践の欠如ではないだろうか。

「美德の実践」とは、VPでは人格の発達に繋がり、Frommの愛の理論では能動的な行為である。それらを統合した表現に言い換えるならば、人を真に「愛すること」とは、美德を実践することであり、それが人格の成長につながる、ということになる。そして、現代は資本主義の社会であるからこそ、人間の本性を見失わないように「愛する、美德の実践」を子育て支援の一環として伝える必要がある。例えば親が子どもの躰の場面において、状況を冷静に忍耐強く理解し柔軟性と寛容に対応し、最終的にはゆるす行動と同時に、子どもの行動が道徳的なものに修正されるならば親の育児行動として理想的である。忍耐、理解、誠実さ、柔軟性、寛容等といった態度は人間が本来持っている潜在的な力である。子育ての中で美德を実践するという支援の方向性は、今までの認知の仕方や行動に変化を期待することができ、人間関係にも改善をもたらすことができると考えられる。これまでに多くの子育て支援がなされているが、育児困難や虐待が増加する一方であるという事実から、新たな支援の方向性が必要であると考ええる。

4. 妊娠期から美德の実践方法を子育て支援の一環として取り入れる

自尊感情や自己効力感は育児に関連する要因であり、それらの改善につながるサポートが必要であることは前述した。リコーナ³⁶⁾は自尊心を育てるには美德の資質を身につけることであると説

表 3. 52の人間の資質を表わす言葉を virtues（美德）として表現

愛	識別	誠実	名誉	共感	親切	忠誠心	ゆるし
いたわり	自制心	辛抱強さ	優しさ	協力	信頼	慎み	喜び
思いやり	自信	整理整頓	やすらぎ	勤勉	信頼性	手伝い	理解
感謝	柔軟性	責任	目的意識	決意	正義	忍耐	理想主義
寛大	正直	節度	勇気	謙虚	清潔	奉仕	和
寛容	情熱	創造性	友好	優秀	自己主張	無執着	礼儀
気転	真摯	尊敬	コミットメント				

注釈

価値観は文化によって変わるがこれらの言葉は特定の宗教やイデオロギーに偏っておらず、これらは、人間の資質の要素である。(Linda Kavelin Popovらが提唱した実践生活の場で活用する52の virtues)³⁸⁾

明している。そして、彼は、「良い性格」または「人格の向上」を論じる際に、アリストテレス (Aristotelēs) の言葉を引用している。アリストテレスの道徳に関する教えでは、「徳は単なる思考ではなく、徳ある行為を行うことによって形成される『習慣』である」とし、良い行為を実践するには、単に知識として知っていることではなく、それを習慣化し、実践していかなければならないとしている。道徳の「徳」ということばは、ラテン語の Virtue (美德) に相当し、道徳とは「徳を実現する道」として考えることが妥当であると述べている。

では、「良い性格」を育むには、いつごろより支援をすればよいだろうか。ボウルビィのアタッチメント理論³⁷⁾でも説明しているように、乳幼児期に不適切な養育態度を継続して受けることにより愛着が歪むことから支援はなるべく早期に実施する必要性がある。また、母親への介入研究のメタ分析を行った文献によれば、介入は産後よりも妊娠時からの方が心身の安定や虐待予防に効果があり、事件が発生してから介入する場合のコストは莫大であることを論じている³⁸⁾。とするならば、リスクに焦点を当てると同時に、ポピュレーションアプローチとして妊娠時期から美德の実践方法を子育て支援の一環として取り入れることは理想的である。

美德を日常生活の中で実践することは全ての人間に必要なことである。しかし、特に次世代を担う貴重な子どもたちを養育している親たちは責任重大な任務を果たしているという意識に立てば、自ずと真実の子育て支援を望むであろう。そして、これまでの子育て支援になかった、人間本来持っている美德の行動実践を呼び覚ます支援は新たなパラダイムとして考慮する価値は十分にある。

まとめ

子育て支援は物質的なものだけにとどまらず、いかに人を慈しみ愛するかということ視野に入れ、次世代育成を考えることが必要である。愛することが人間の根源的なことであり、それが人類の繁栄に繋がるため、美德の視点を培う子育て支

援の新しいパラダイムをむかえなければならない。

謝 辞

本総説を執筆するにあたり、これまでご指導いただきました元神戸市看護大学学長・金川克子先生、富山大学大学院医学薬学研究部地域看護学講座教授・田村須賀子先生に深謝いたします。また論文の投稿にあたり御助言をいただきました富山大学大学院医学薬学研究部人間科学1講座教授・金森昌彦先生に感謝します。

参考文献

- 1) Main M, Kaplan N : Security in infancy childhood and adulthood ,A move to the level of representation. *Child Development* 50:1-2, 1985.
- 2) Fonagy P, Steele H : Maternal representation of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one old age. *Child development* 62: 891-905, 1991.
- 3) Kirkpatrick L, Hazan C : Attachment style and close relationships, A for-year prospective study. *Personal Relationships* 1: 123-142, 1994.
- 4) Ainsworth M, Blehar M, Waters E, et al : *Patterns of Attachment, A Psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ, Erlbaum: 147-151, 1978.
- 5) Hazan C, Shaver P : Romantic love Conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology* 52: 511-524, 1987.
- 6) 久保田まり : アタッチメントの研究, 内的ワーキングモデルの形成と発達 (第1版). pp132-156, 川島書店, 東京, 1997.
- 7) Holmes J : Social isolation and rejection in children, The child's perspective. *Child Development* 61: 2004-2021, 1993.
- 8) Romito P, Crima M : Adult outcome in

- women who experienced parental violence during childhood. *Child abuse & Neglect* 27: 1127-1144, 2003.
- 9) Zeanah CH, Scheeringa M : Reactive attachment disorder in maltreatment toddlers. *Child abuse & Neglect* 28: 877-888, 2004.
- 10) Vungkhanching M, Sher KJ, Jacson KM, et al : Relation of attachment style to family history of alcoholism and alcohol use disorders in early adulthood. *Drug Alcohol Depend* 15: 47-53, 2004.
- 11) 大西美代子, 長沼佐代子, 生田憲正: 身体的虐待と思春期の精神病理. *精神科治療*18: 1189-1196, 2003.
- 12) 渡辺久子 : 母子臨床と世代間伝達 (第1版). pp11-92, 金剛出版, 東京, 2001.
- 13) 厚生労働省 : 「健やか親子21」中間評価報告書, 推進検討会.
<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/mokuhyou1.html>
2013/9/9.
- 14) 厚生労働省 : 「健やか親子21」公式ページ 母子保健・医療情報データベース.
<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/abstract.html>
2013/9/9.
- 15) 厚生労働省 (2005) 子ども子育て応援プラン
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/12/h1224-4b.html>
2013/9/9.
- 16) 厚生労働省 : 少子化社会 対策大綱に基づく具体的実施計画
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w2007/19webhonpen/html/i1211500.html>
2013/9/9.
- 17) 厚生労働省 : 児童相談所における児童虐待相談対応件数等
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv16/>
2013/9/9.
- 18) 中谷謹子, 岩井宣子, 中谷真樹 : 児童虐待と現代の家族 (第1版), pp2-23, 信山社, 東京, 2003.
- 19) 前掲14)
- 20) 児童虐待防止への対策と支援:公益財団法人大阪府市町村振興協会
http://www.masse.or.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/17/16_kiyou.pdf#search
2013/9/9.
- 21) Linda KP, 大内博翻訳 : 『52の美德』教育プログラム (第1版), pp13-30, 太陽出版, 東京, 2005.
- 22) Popov L K, Popov D, Kavelin J : The family virtues guide: Simple Ways to Bring Out the Best in Our Children and Ourselves (1st ed), Wellspring International Educational Foundation, pp1-9, Penguin Books USA, 1997.
- 23) 加藤好治 : 「美德の時間」52の美德教育プログラムの実践—言葉が人格を形成する—. 愛知県総合教育センター研究紀要96: 19-28, 2006.
- 24) 前掲21), 13-19.
- 25) 浦山晶美 : 心理的アプローチとして「美德・教育プログラムの方法」(Virtues Approach)を取り入れた「マタニティークラス」の編成とその効果について. *母性衛生* 50 : 620-628, 2010.
- 26) 遠藤辰雄:セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求— (第1版). ナカニシヤ出版, 東京, 168-198, 1992.
- 27) 森口兼二 : 自尊心の構造 (第1版). 松籟社, 東京, 17-56, 1993.
- 28) A.H. マズロー著, 小口忠彦翻訳 : 人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ (第1版). 産業能率大学出版部, 東京, 31-54, 2000.
- 29) 浦山 晶美, 松井 弘美, 永山 くに子: 心理的アプローチとして「美德の概念」を取り入れた両親学級の介入効果: *日本助産学会誌*26: 241, 2013.
- 30) 村上京子, 飯野英親, 塚原正人, 他 : 乳幼児

- をもつ母親のストレスに関する要因分析. 小児保健研究64(3): 425-431, 2005.
- 31) 園部真美, 白川園子, 廣瀬たい子, 他: 母親の社会的ネットワークと母子相互作用, 育児ストレスに関する研究. 小児保健研究65: 405-414, 2006.
- 32) 清水嘉子: 育児ストレスの実態研究—ストレス情動反応を中心として—. 母性衛生44: 372-378, 2003.
- 33) Erich Fromm: Art of Loving (1st ed), Harper Collins Publishers New York, 1956.
- 34) エーリッヒ・フロム, 懸田克躬翻訳: 愛すること (第2版). 紀伊国屋書店, 東京, pp1-36, 1975.
- 35) 前掲28)p42-81
- 36) 渡邊弘: リコーナの道德教育論—『こころの教育論 (Educating for Character)』における理論的枠組構成の吟味を中心に—. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要27, 207-220, 2004.
- 37) J. ホームズ著, 黒田実朗翻訳: ボウルビィとアタッチメント理論 (第1版). 岩崎学術出版, 東京, pp79-110, 1996.
- 38) Pinguart M, Teubert D: Effect of parenting education with expectant and new parents: A meta-analysis. Journal of Family Psychology 24:316-327, 2010.
- 39) Popov LK, 大内博翻訳: ヴァーチャーズ・カード—52の美德のエッセンス—, 太陽出版, 東京, 2005.

